

光の子



No.130 2008.6.20

●年間聖句 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。
だが、死ねば、多くの実を結ぶ。(ヨハネ福音書12章24節)



「いらっしゃいませ」

挿絵・中島英子

「汗美しく」

遠河鹿月の光となりにつけり

母の日の源流を手に掬ふな

熱心は美しく汗美しく

あいさつは笑顔の連鎖更衣

たちまちに風になり風薫るなり

月見草歩くしかなき野のほとり

光の子だれにも負けぬ大日焼

落合水尾（「浮野」主宰）

皆様の祈りとお支えのうちに、二〇〇八年度がスタートいたしました。幼児四・小学生十八・中学生六・高校生七・計三十五名と卒業生五名・職員二十三名と共に、

家族になる

施設長 田中 郁夫

二十四回目の新年度を迎えることができません。心より感謝申し上げます。私自身、施設長として三年目を迎えて、日々判断を迫られることの多さに戸惑い、改めて子どもたちへの責任の重大さを痛感させられる日々であります。

光の子どもの家で共に暮らしてきた子どもたちは、二十三年間で六十名を数え(現在生活している三十五名を除く)、その内約半数が家庭引き取り、残り半数は中退し

た三名を除き高校を卒業し、その後、中退した子どもも含めて白立の自立の道を選択した子どもたちです。そして、今年の三月に高校を卒業して就職した二名の子どものも、親元に帰れずここから通勤する道を選択しました。数年前より高校卒業後の子どもたちが一人で生活が送れるようになるまでの支援方法として、私たちの目の届く範囲内で生活させることが必要になってきています。現に今措置されている子どもたちをみると、やはり措置解除後の支援が必要となるケースがほとんどであると予想され、今後はそのような子どもたちに対応できるような施設独自のハード・ソフト面の充実を図る必要があると考えております。

症し様々な取り組みをしましたが社会的自立は難しくなり、結局他県の精神病院へ入院し、生活保護を受給して生活を送って来ました。その後山内はそこで色々な問題行動を起こしてしまい、三年前に服役を余儀なくされたのです。結局電話があったのは出所後二日目、帰る場所が無かったのです。その時私は思いました。今ここに来たらここで生活をしている子どもたちにかかりの影響があるだろう。公的扶助は発生地主義だからそちらで何とかならないのだからかとやりとりをしました。しかし埒があかず最終的には「ここを巣立っていった子どもでも助けを求めているのだから受けよう」ということで駅前交番へ連絡をしたところ、我々の返答に時間がかかりすぎ、その間に山内は駅前交番から歩いて出て行ってしまったとの報告を受けました。その時以来我々の心は重く彼にすまない気持ち一杯になりました。

生活保護を申請して精神病院へ任意入院させましたが、結局三ヶ月後には不適応をおこし自分で出て行ってしまいました。山内は一時行方不明でしたが、十日後に自分でどうすることもできず、公的機関に助けを求めて生活支援を受けながら通院をしています。山内の将来を考えるとこのまま一生公的機関を利用しながら生きていくことになるのか、我々はどこまで関わりをもてるにか等、本当に考えさせられました。

お見舞い

～大高さんの回復を祈りつつ～

東大宮教会教会員 桐生 純子

「桐生さん、大高さんからのご指名で拒否権はないですから。」突然の菅原さんからの原稿依頼。目が点になり、鈍い頭が菅原さんの勢いに益々思考が鈍くなり：

わが教会の大切な長老である大高晋一郎さんが突然の病に見舞われ、今闘病、リハビリ中なのであります。ご夫妻にとって、正に試練の時。できる事であれば少しでもお支えしたい、という気持ちはあっても、こういう形でのお支えは夢にも考えておりませんでした。私にとつてはあまりにも大役で、その器ではないと申し上げました

が、拒否権がないことと、「それが大高さんのお見舞いになると思つて」と押し切られてしまいました。

今この時も、大変な思いをしていらつしやる大高さんのことを思うと、教会員としては、「これは神様からのお導きなのだ」と、受け入れるのですが、信仰が薄い者で、今でも心の中で葛藤しております。

♪親指、人差し指、中指、薬指、小指もみんな、仲良しさん、仲良しさん♪

九年前より、東大宮教会の教会学校の教師として光の子どもの家の皆様とは、お付き合いさせて頂いております。教師というには、とてもお恥ずかしく、いつも個性豊かな子どもたちと彼らを全身全霊でサポートしている職員の皆様方に学ぶことしきりです。

私はその中でも一番年齢の低いクラス、幼稚科(〇歳〜学齢前)さんのかわいい五名の子どもたちを、分級では担当させて頂いております。昨年度までこの教会学校で長い間教師として奉仕をして下さつておりました西貝洋子さんの元で修業をさせて頂きました。まだまだ修業が足りないのですが、若くて頼もしい強力なヘルパー、瀬田恵子さんと共に、楽しく充実した時を過ごせます様、心したいと思います。

生徒歴の一番長いAくんは、礼拝やその他の場面では、担当の職

員の方に甘える場面が見られますが、分級では時には皆のいすを出したりしまつたり、一人でお話もしつかりと聞き、質問にも的確に答えることができます。とても頼りになる年長さんです。

Bさんは昨年の一〇月より生徒となりましたが、この半年ちよつとで、表情がとても柔らかくなりました。始めはお返事もなかなか出来ませんでした。二ヶ月後には声が出るようになり、今では笑顔で大きな声でお返事ができます。お友達と保育園の歌を大きな声で元気よく何度も歌ってくれた時はびっくりしました。大きな目でじつとこちらの様子を伺うように見つめていた緊張の表情から、今ではその笑顔に「安心」が見てとれます。

Cくんは二年前、二歳で生徒となりましたが、訳もわからず、しかも静かにしてはくなくてはいけなないので、担当の職員の方はそれを躰けるのに、大変ご苦労していらつしやいました。今では四歳にしてしっかりと礼拝を受ける態度が着きがない時は、私たち担当者の力不足です。

この二月に入つたばかりのDく

んは、中々担当の職員の方から離れられない二歳児です。私たちとは距離を取りつつも、こちらの様子をじつと見ているそのつぶらな瞳を知っていますよ。お名前を呼ぶとちゃんと手を挙げて返事をしてくれますね。

お父様とお兄ちゃんと一緒に通つているEさんは、中々心を許してくれませんが、この頃はびっくりするくらい、お話しをしてくれます。実はウルトラマンが好きなんだよね。

この様に、あまり大人を信用できない子どもたちが、生活の安定の中から人との関わりを求め、自分を表現することを自らに許し、色々なことを吸収していく。職員、保護者の方々の日々の努力に思いを馳せ、その成長を共に見守っていく者でありたいと願っております。

「わたしの名のためにこのよう一人の子どもを受け入れる者は、私を受け入れるのである。」(マタイによる福音書 一八章五節)



エッセイ

アトリエにて

彫刻家 中島 睦雄

今年も例年のように、四月の末近くまでかかって、彫刻の作品を一応作りあげた。

一応と断らなければならぬ訳は「よしっ、仕上がった。思い通りにできたー!」とは思えないからである。つまり、展覧会の搬入日を考えて、一応作りあげただけなのだ。もう少し手を入れてみたいと思うのだが、これはキリがない。時間があればあったで、ごたごたこねくりまわしてしまっ、かえって作品の出来を悪くしてしまうことだってあるものだ。したがって「この次の作品は立派なものを作るぞ。」と、言い訳じみた言葉で自分を納得させて、今回の作品は一応できあがりである。

二ヶ月程前から、知り合いのM子ちゃんにモデルになってもらい。回転代の上に立たせ、前後左右からデッサンをする。デッサンの途中で「右手はうしろにまわして」とか「右足を少しうしろに引いて」とか注文し、ああでもないこうでもないやり直しをしながらポーズを決定する。

今度の作品は、頭の上におぼんのようなものを置き、その上にバナナの房を乗せて、これを運んでいる姿にしてみた。一メートル七十センチ位の高さである。体は半分裸のようなもので、サラッとしたうすい布を、左肩の上で結んで、右手も左手も出したまま、衣服というのではなく、うすい布をサラッと下げただけ、まるで古代ギリシアの彫刻に見えるような布の流れを与えた女性像である。

ポーズが決まると、芯棒作りである。三センチ角くらいの鉄棒の支えを使って、胴体や足腰、手足などの芯棒を作る。これに、粘土がずり落ちないようにシユロ縄を巻いておく。その上で本格的に粘土を付けていくやり方であつて、ノミで掘り込んでいく彫刻ではない。厳密に言えば彫塑というやり方である。

モデルさんには二十分ポーズをしてもらい、十分の休憩で、これを二時間か三時間くり返すことになる。モデルさんも大変だが、制作にあたるこちらが大変である。立ったりしゃ

がんだり、粘土を付けて、小さい角材でたたいてみたり。音楽を流しっぱなしにしているが、聞いているようで聞いていない。むしろモデルさんの為に飽きさせないように思っているのだが、音楽に励まされている事もある。

時々、家内もアトリエにやって来て、デッサンをする。鉛筆やコンテで描くのだが、あくまでも私の制作が中心なので、二、三分でモデルさんの方向を変えてしまったりすると、家内のデッサンは中途半端になってしまう。しかし、それはそれでかまわないのである。私の方の作品が或る程度すすんでくると、そばで描いている家内が、突然評論家になってしまう。「目と目が離れすぎていますよ。」とか「左右の耳の位置が違うみたいね。」などと言う。私は私で言い返す。「何だよ!天才彫刻家の作品にケチをつけるんか?」と。しかし、冷静な第三者の目は、案外的に射ている場合が多い。「大評論家の言うことも、たまには聞いてみるか。」と、少し作品を手直ししてみるといふ流れもある。

評論家と言え、ニワカ評論家も一人いる。近くに住んでいる弟が時々やって来る。「今度は何を作ってるんだい?」と言う。私は、「良く見てみるよ、これはなあ、人類が食料の危機に瀕している時、食べ物を運んできた神様の

お使いの姿なんだぞ、ありがたい像なんだから、手を合わせて頭を下げる。」と言う。弟は弟で「説明をしなくちゃわからないような作品は、ロクなものじゃないね。」と言う。「それにしても俗っぽい作品だなあ。」とまで言いやがった。天才彫刻家に向かって何と無礼なことよ。「評論家はいいなあ、自分で作らないでケチをつけてれば良いんだからな。」

モデルのM子ちゃんは「また漫才が始まった。」という感じで、エヘエへと笑っている。

何ポーズか進んで疲れた頃に、少し長めの休憩をとる。家内が用意したイチゴなどを食べながら雑談をする。しかし、そんな時、ついつい作品に目がいつってしまうのである。そして、作品の欠点も見えてくることもある。少し手が短かいかどうか、顔の表情を明かすくした方が良いなとか。つまり、あまり休憩にはならないことも多い。

「さあ!ラストポーズだ。」とM子ちゃんを励まし、自分を励まして、また制作に取り組んでいく。

流れていた管の音楽は、いつの間にか終わっている。



パラグアイの三つの結婚式(その一)

JICAシニア海外ボランティア 仙道 富士郎

パラグアイに来て一人で生活するようになってもう四ヶ月近く経った。いま痛感しているのは、これまで自分がどんなに他人に助けられて生きてきたのかということである。一般的に言っあたりま

えの話ではあるが、私の場合、人並みはずれて他人に対する依存度が大きかったということらしい。その証拠に、一人で生活してみると、とんでもないミスばかりしている。霜取り機能のない部屋の冷蔵庫の冷凍室を占領しうになつた氷を取り除こうとして包丁で氷を突

いていたら、「ヒュー」という音とともにフロングラスが冷凍版から出てきて、冷蔵庫を一台壊してしまつたり、セーフティボックスの鍵をなくしてしまい、ホテルのご主人に、強盗よろしく、セーフティボックスの鍵

を壊させたり、穴があつたら入りたくなるようなことを繰り返している次第。

とはいっても、ここでも私は、現地の人達から多くの援助を受けて生活しているのである。特にお世話になつているのが、青年実業家の日系二世のTさんである。その彼が「パラグアイの結婚式を経験するのも良いでしょう」と、奥さんの友人の結婚式に連れて行ってくれた。まもなく、私が逗留している日系の方が経営しているホテルの奥さんがご長男の披露宴の案内状を部屋に届けてくれた。と、今度はTさんが「田舎の結婚式も面白いかも」と、彼が経営している七十町歩の農場の管理をまかしている人のお嬢さんの結婚式に招待してくれた。シニアボランティア多しといえども、一ヶ月半の間に現地の結婚式に三回も出席できたのは、私ぐらいいではあるまいか。感謝、感謝である。

最初の結婚式は、午後八時からカトリック教会で行われ、その後披露宴は九時から始まつた。誰が挨拶をするでもなく、ただ皆飲み食いしている。やああつて、パラグアイでは、どの結婚披露宴でもそうなのだが、新婚夫婦が最初に

ダンスを踊り、そのあと彼らは次々に相手を変えながらダンスを続けていく。大分時間の経つたころ、二つの椅子が中央に向かい合つて置かれ、花嫁とその女友達が片方の靴の裏を合わせるようにして椅子に座る。と、そばにいる花嫁が花嫁のスカートの中からゴム輪のようなものを取り出し、それを花嫁の友人の脚を通してスカートの中にあるゴム輪を押し込んでやるのである。花嫁の友人は次々に変わり、この作業は延々と続くのである。Tさんの話によると、「女の人と遊ぶのはここまでにしてね」という意味合いだそうだが、さすがに驚いた。宴は延々と続き、午前一時を回つた。Tさんは「本当はキーキをいただいて帰るのだが――」と言いながら、身重の奥さんが疲れてしまったこともあり、私たちは家路についた。

ホテルのご長男の披露宴は、私たちがいつも利用させてもらっているテニスコートにテントをはつて行われた。この披露宴にも驚いた。すべてのことが日本式なのである。研究所の同僚の日系の先生に尋ねると、お祝いは日本と同じくお金をつつむというので、スパーに行つてそれらしい袋を買つ

てそれに現金を入れて持つて行つた。ところが、私以外の人は皆、立派な水引のかかつたご祝儀袋を受付の人に渡しているではないか。披露宴は日本でも一時はやつた、新郎新婦の男女の友人の司会のもとに始められ、来賓の挨拶もあつた。ただ、日本の披露宴でよくある、いわゆるお偉いさんの話ではなく、学校の先生の心温まる話で、楽しい気分ですピーチに聞き入つた。パラグアイの山形県人会の会長さんの話をしていたら、現地採用のJICAの方が、この会場に来ていたことを教えてくれ、席に挨拶に行き、再開を約束した。時間を守る日系人の披露宴は、三時間で閉じられた。

(山形新聞より転載)



プリズム

河のほとり

倉澤家

新緑の美しい季節がやって来ました。皆さま、お元気でしょうか。さて、倉澤家の子どもたちも新年度を迎え、それぞれが順調なスタートを切っています。

小学二年生になった成黎は、一年生を迎え、気分だけは(?)すっかりお兄さんになったようで、

「オレ、二年生になったから自分でやらなくちゃね。」という言葉をお兄さんなどが多くなってきました。

長い間失業していた卒園生の重紀も、四月一日から老人ホームでの仕事を始めました。久しぶりの仕事に体は少ししんどいようですが、先輩方に良くしていただき、充実した毎日を送っています。

三月に高校を卒業したばかりの乃衣も四月一日から社会人になりました。サービスマンに就いた為、二時から二時半までの勤務となり、生活リズムが大きく変化しました。慣れるまでは大変ですが、こちらも先輩方にかわいがっていただき、毎日楽しく仕事をさせてもらっているようです。

新しい世界でがんばり、くたくたにな

って帰って来る子どもたちを、笑顔とお話しして迎えることのできる担当者でありたいと思っています。今年度も、子どもたちの生活を大切に、一緒に楽しんでいけるようがんばります！

倉澤 智子

子どもたちの季節

仙道家

月日の流れは早いもので、私が光の子どもたちの職員となってから二度目の春を迎えています。今年度から私と私のグループの子どもたちは原田家から仙道家へと移りました。今年度からは池田さんと鈴木(康)さん、そして新しく私たちの仲間に加わっていただいた岩瀬さんと共に仙道家の暮らしを築いていきたいと思っています。

子どもたちは家や家メンバーが替わり、担任が替わり、クラスメンバーも替わることも多いので、新しい環境に慣れるまで不安でいっぱいだと思います。それでも毎日元気に学校へ通い、元気に遊んでいます。そんな子どもたちのためにも安心して疲れを癒し、次の日のエネルギーを蓄えられるような家でありたいと思

います。

この春、子どもたちも大人も別れがあり、出逢いがありました。別れはとも辛いものですが、別れがあったからこそ出逢えるのだと思います。だからこそ、その出逢いを大切にしたいと思っています。私は昨年の春、私のグループの子どもたちに出逢えたことを心から感謝しています。そして、この出逢いをこれからもずっと大切にしていきたいと思っています。

高野 真夕子



光の中で

佐藤家

二〇〇八年度、この一年、いや七ヵ月後を思い悩んでいるのは高三の省二です。彼は来年の一月にセンター試験を控えているのです。

彼は現在光の子どもの家の子どもの家の中で、ダントツに勉強に取り組んでいます。

子どもです。子どもとはいえ、もう一八歳になります。最近また一段と顔が大人びてきました。

高校生という思春期真っ只中の複雑な心を抱きながら、自らに鞭打って受験勉強に取り組み姿に、ある種の迫力を感じます。そしてその姿、また取り組みに共感を覚えるのです。

私自身の高校時代を思い起こし、大学受験に向けて勉強した時間と量を考えると、一生の内に一つの目標に向かってこんなに勉強するという経験はもはや出来ないうらと思えるほど勉強したことを思い出します。そして今、これがなかったら、今ここで大学受験を目指す子どもたちに伴走する者の中の、直接勉強に関わる役割は出来なかつただろうと思います。

毎年、一月二〇日が近くなるとウズウズと落ち着かなくなりまして。それは良くも悪くも高校時代のセンター試験の記憶に起因しています。勿論勉強が全てではない、部活でもなんでもいい。兎に角、遮二無二未来に向かう若人に伴走できることが嬉しくてたまらない、そんな毎日です。

鈴木 洋一

原田家日記

昨年の秋、小西指導員が原田家の玄関先のスペースに花壇を作り、苗を植えてくれました。色とりどりの花が咲き、家に帰ってくるのが楽しくなるほどきれいになりました。花は枯れても根から枯れることはなく、放つたらしにしていてもしっかりと生きていたのです。そして暖かくなると自分の力で花を咲かせました。そんな小さな苗の大きな生命力に感動した春でした。

と同時に、我が家の小さな子供たちのことを重ね合わせて考えました。彼らを持つ大きな大きな「育つ力」を信じ、彼らのペースで花を咲かせる時を待つことが、見守ることが、私には出来ているだろうか？今年もこの一年の生活を反省させられる春でもありました。

私がおこにきて三年が経ち、四年目の春がもうすぐ終わろうとしています。時間を重ねるたびに自分の力不足をより

強く感じるばかりですが、子供たちだけでなく自身の育つ力も信じて、子供たちと向かい合っていけたらと思います。

鈴木 晶子



季節のおとずれ

竹花家

新年度が始まり一ヶ月が過ぎようとしています。今年度、竹花家は職員の変更とメンバーの入れ替わりがあり、新たなスタートを切りました。

私自身もこの春より竹花家を担当することになりました。三年間を過ごした本園とは少し距離が離れてしまい、特に本園で担当していた子どもたちとは「別れ」ではないと分かっています。共に悲しみ泣き励まし合って年度末を過ごしました。グループホームでの生活は、不安もありましたが、今は初心に帰り、新たな気持ちで生活作りをしていきたいと思っています。

竹花家では小学校に冬子が、中学校に知香がそれぞれ入学しました。冬子は毎朝ランドセルを背負って登校班に付いていく事で精一杯。下校時、迎えに行く「またあの通学路を歩くのか」と思っ

新任職員の挨拶

牧野由紀子

しまうのでしょうか。「帰りたい...もう学校にお泊まりしたい」と言うこともあります。知香は以前から希望していた吹奏楽部へ何年度も見学に行き、いよいよ本入部。充実した毎日を過ごしています。子どもたちが力を十分に発揮できるように落ち着いた家づくりを目指していきたいです。今年度もよろしくお願

はじめまして。私は四月から光の子どもの家の職員となりました。塩原佐織です。隣の加須市で生まれ育ち、この光の子どもの家では約二年間、学習ボランティア・現場実習とお世話になりました。

私にも、何かできることがあれば...と思いつき、足を踏み入れたのがきっかけですが、実際は子どもたちの笑顔や元気、たくましさにかえって励まされることの方が多かったように思います。ふとした時、「〇ちゃん、元気かな？勉強頑張っているかな？」と気になるようにな

り、自身にとって光の子どもの家、そこで暮らす子どもたちや職員の方々の存在がこれほどまでに大きくなっていることに、改めて気付かされたのでした。ご縁あつて出会えたこと心から感謝いた

本年度より光の子どもの家の職員となりました岩瀬志穂と申します。群馬県の大泉町から来ました。

塩原 佐織

こちらに来てから毎日、一面の田園、自然に囲まれた良い環境の中で子どもたちの太陽のような明るさ、パワーに圧倒されながら、日々生活しています。

先輩の職員の方々に助けられながら、少しずつ生活の流れをつかめてきました。ばかりで、子どもたちと向き合う中、自分の判断力の無さ、無知、未熟さを痛感しながら、試行錯誤の毎日です。

今、自分は子どもたちの為に何をすればよいかと考え、手探りに行動しながら一緒に笑い合ったりし、子どもたちとどうぞよろしくお願

岩瀬 志穂

家族に関わる その23

菅原 哲男

入所 出生 絶対受容

児童養護施設光の子どもの家は創立以来「子どものための子どもの施設」建設とその運営を理念として掲げ、子どもの養育に当たってきた。

子どもたちが光の子どもの家を利用するためにやってくるには児童相談所からの入所依頼がその発端になる。その依頼を受けて可能な限り全職員が参加する職員会議で協議して対応してきた。

入所はその子どもが初めて光の子どもの家に行くと決まるとのことである。ある家にピリオドをつけずに住む子どもが増えるということは、多くの場合出産によるものだろう。だから入所の時にその家に子どもが生まれる場合を想像する。

お互いに惹き合う異性が共に暮らすことを決心して同居にいたり愛し合う中で妊り、長い日数をかけて出産に至るのである。出産に臨む母は、元気で健康な子どもが生まれるように祈るだろう。人は自らの力を超えた状況に至るとき祈ることをする。出産を目前にした女性はつとに信仰的になる。あちこちに安産の神々を祀るほこらや

宮があることを見ても、そのことはその外れな推測ではないだろう。そのようにして母親の祈りや家族の期待と不安の中で生まれ出るのである。

一方、児童養護施設への入所はこのような大それたことの中にはないのが一般だろう。施設によっては電話で依頼されたその時に可否を施設長なりそれに近いものが判断して答えることがあるだろう。

しかし、児童養護施設を利用する子どもたちの状況は、家族が仲良く暮らしてくれらたという子どもの願いとは全く異なっていて、ほとんどの子どもたちは希望を失い絶望的であるだろう。だから、光の子どもの家では、それが「私でなければ」という受け入れを表現するまで協議を続けるのである。不安と絶望的な状況の子どもを、「何で私が」と拒否的であったり仕方なく受け取るようでは子どもによりよく対応できないからである。

先頃ここを出て行った女子が妊つてやってくる男児を産んだ。出産という事実が持つ力に圧倒される半年余りその親子と共に過ごした。

出産後の母子：特に新生児に対して

周りの子どもや大人たちの態度は、全てを受け入れるというものであった。新生児と母親及びそれに近い大人との関係は、まさに絶対受容そのものである。全てを受け入れて、あまつさえ喜んでいるのである。よしんばその妊娠が母親の倫理的に外れたものであったとしても、そのような条件は全く問題にならなくなるのである。出産の持つ贖罪性を感じさせられもした。泣いても汚しても誰も怒ったり叱ったりしないのだ。

このような受け入れの状態を私たちは絶対受容と呼んでそのようにするよう努めてきた。

子どもの入所の日をもう一つの誕生日として記念してきたのである。何歳で入所してきた者であっても〇歳児だったらと私たちは想像するのである。これはなかなか困難なことなのだ。そのように申し合わせ、出来るだけ受け容れるように対応してきた。そこから心も体も傷だらけの子どもには関われないのである。相当な時間が過ぎて年齢相応に心や体に傷が癒えて育ってきたときにそれに相応しく関わることを心がける。そこに到達するまでは、それまで生きてきた年月の倍か三倍ほどの時間を要することが通常である。

これは言葉で言うほど楽なことではない。ある者は疲れ果ててバーンアウトすることもある。まさに子どもたちは、志をもってやってきた大人でさえもバーンアウトするほどの過酷な状況を強いられて生きていたことをそのたびに確認させられる。

また、やってくる子どもたちの、新生児が大人から受ける絶対受容的な受け容れを経験してきたかどうかによってその人格にもたらす影響は計り知れないほど大きいのである。

エリクソンが言う発達段階の初期にある基本的信頼と疑いは、この時期にもたらされるものであることを確認させられるのである。絶対受容を経験できた者はおおむね隣りに人がいることを意識でき、信頼を基軸とする人間関係を築く可能性をもっているのである。入所依頼を臨月間近の妊婦の状況と捉え、そのように心の準備をして迎えられるのである。生まれ出たら祝うのが通常なのだ。だから入所してきたことを生まれ出でた子どものように受け容れ喜び祝うことを私たちはしてきた。祈りつつ喜び祝う中から始まる光の子どもの家の生活なのである。

理念を捨てて現実と妥協する中で子どもは育たないのだから。

現場から

続・光の子らしく

30

岩崎 まり子

緑の美しい季節です。お元気ですか。身の回りの変化に戸惑っている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

丘実ちゃんもその一人です。彼女は先日、何故母が何年も会っていないのかを知ったのです。

丘実ちゃんの中で母についての情報は錯綜していました。祖母からは「入院してる」、母からは「仕事を頑張ってる」、私からは「私たちが、事実のあまりの重さに伝えることを躊躇していました。いえ、怖気づいていたのは私です。伝えられた後の彼女を支え、守っていく自信がなかったのです。本当にいつでも子どもの

必要性より自身の都合を優先させてしまうことに反省させられます。それで丘実ちゃんは、「お母さんに電話したい。でも無理だよね。」

「お母さんに手紙書きたい。どうせ返事はこないと思うけど。」

などと、こちらの出方を伺うような物言いでも表現することが増えてきました。年令的にも状況的にもギリギリだろう。現実告知のことを菅原にお願いしてからも、彼女のショックの大きさを生きていることの辛さを思っただけで泣いてしまっている。でも彼女は「辛い」と泣くだけでは済まない現実を生きていくのだと改めて自身の甘さに

喝を入れなければいけない日々を過ごし、その日を迎えまします。担当者は待つていことしか出来ません。そして、話の終わった丘実ちゃんは顔を真っ赤にしてブンブン怒ったように帰ってきた。玄関に入るなり号泣してしまつたのでした。同じように泣きながら迎えることしか出来なかった私。けれど、その直後、「相当な痛みです。後の看護をよろしく。」との菅原からの短い涙声のメッセージが、わたしの足腰をしゃんとさせてくれました。抱っこして彼女を部屋に連れて行くと、腰を切つたように何の話だったかを話しながら丘実ちゃんのことを大切に思っているかを話しました。丘実ちゃんの嗚咽が小さくなった頃、遠慮がちに理奈が顔をのぞかせ、「ど・う・し・た・の？」

と口の動きだけで尋ねにきました。私が黙って頷くと、察してくれたのか彼女も頷き、またそつとドアを閉めました。

大きく息を吐き、私のひざから下り、「もう大丈夫。でも菅原先生に会

うのは、ちよつとやだな。」といえるくらい落ち着いた丘実ちゃんがダイニングに行くと、中学生の由子ちゃんは自分が食べていたおやつを、「食べていいよ。」

理奈ちゃんも大好きなポテトチップを、「これ、あげる。」

直接的な表現はどこにもないのですが、何となく皆が心配してくれていたことが伝わってくるような空間の中で、改めて「私が支えられるか否か」など何てごう慢なことを考えていたのだろうと思わされました。

もう知らなかつた頃には二度と戻れないでしょうし、負ってしまった荷の重さは凶り知れませんが替わってあげることが勿論、共に担うことすら出来ないのかもしれない。ただ一緒に居ること、彼女のどんな表現からも逃げずに居続け、「それでも丘実ちゃんに会えて良かった」と伝え続けられるよう努力していきたいと思っっています。共に暮らし合う人たちと共に...



「もう大丈夫。でも菅原先生に会



6月7日(土)、お陰様で晴天の下、
今年も小さくても大バザーを行いました。
今年度のバザー総売上金額は、

478'614円 となりました。

皆様には多数のバザー用品をご献品頂き、
心から感謝申し上げます。
今後ともご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。
光の子どもの家 バザー実行委員会



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2008年2月1日▶2008年3月末日

2008年2月

幼児5名 小学生18名 中学生6名 高校生8名 措置外4名
計42名

- 1日 田中春女先生の記念礼拝
城和良くん入所 かわいい2歳児をみんなで歓迎
鈴木晶子保育士が心を込めて担当
小舎制グループホーム研究会へ田中施設長 厚生労働省から何故小舎制がよいのかという質問がある
ロサンゼルスへの海外研修にあたりアメリカ側との更なる連携が求められる
- 14日 大利根町の要保護児童対策委員会へ田中施設長が出席
- 23日 聖学院ワーク 聖学院大学の学生21名来訪 子どもたちと遊んでくださる

〈2月の献品ご寄贈者〉

松本明子 若柳兆慶 大森哲也 浜松元城教会 ドールバナナ ユニクロ ダイエー 他多数の御各位様

3月

- 1日 SBI研修へ牧野保育士が参加
- 6日 誠 志望校である大宮東高校 合格

誠と美季の合格お祝い会 新たな道の決まった二人の決意表明

- 8日 乃衣と有紀 高校卒業式
- 12日 子どもの虹研修へ古谷心理士が参加
- 14日 誠と美季 中学校卒業式
- 15日 出発の会 乃衣と有紀の新たな出発に際しエールを送る 社会人となる彼女らへ多数の方々から暖かいお言葉を頂く これからが彼女らにとっての正念場 今までのわたしたちの関わりを省みながら伴走を続ける
- 17日 子どもの虹研修へ小西指導員が参加
- 20日 田村様散髪奉仕 感謝
- 21日 正太郎と冬子 幼稚園の卒園式
- 22日 第85回理事会

〈3月の献品ご寄贈者〉

嘉藤早苗 朝日新聞 岡本雅道 瀬田慰子 渋谷零 ダイエー 小林精米店 柿内和郎 他多数の御各位様

☆新年度が始まりこの日誌抄でも前年度をまとめることができました。歩みを振り返ると皆様のお支えの大きさに改めて気付きます。心から感謝申し上げます。(洋)

////// ———— 反 射 光 ———— ////

☆関東地方で既に真夏日を記録した日もあった五月が過ぎ、梅雨と本格的な暑さがやってきます☆二十三回目の年度も終わりを告げ、新年度の取り組みを開始しております☆本誌前号でお伝えした新たに高校進学を果たした二名は、それぞれの環境に慣れることに精一杯ながらも毎日楽しそうに高校での話を食卓に運んで来ます☆高校といえは最近やつと問題視されるようになった携帯電話☆高校生の所持率はほぼ百パーセントの今、携帯電話を介してはじめ、援助交際、果ては殺人事件まで起きております☆子どもたちの安全や利益よりも大人の資本的利益を優先するような風潮は留まるところを知らません☆ここを出発つ目途が付くまで携帯電話は持たせないという私たちの取り組みは謂わば世間の潮流に竿を差すようなもの☆しかし子どもたちの安全は保護者の持つ最大の関心事です☆この社会が何を意図して子どもに対するコマーションをしていくかを見極めた上で、子どもの要求に耳を傾けねばなりません☆とは言っても世間知らずで足りるものなど何一つない私たちです☆皆様のお支えとご指導を今後ともよろしくお願ひ申し上げます。(洋)